

隠岐の墓上施設－スヤをめぐる

山崎 亮

はじめに

そもそも墓とは何であろうか。思いつくままに挙げてみても、埋葬場所の目印、故人の死を悼む標識、先祖のよすがを偲ぶ記念碑、本人にとっての死後の住みか等々、さまざまな答えが思い浮かぶ。ただ、その形のイメージとしては、御影石でできた直方体の、「〇〇家先祖代々之墓」と彫られた石塔、いわゆる墓石を思い浮かべるのが一般的ではないだろうか。

けれども石塔は、貴族社会ではすでに平安時代末から見られる——たとえば五輪塔、宝篋印塔——にしても、一般の庶民のあいだに石塔造立が広まるようになるのは、17世紀後半以降のこととされる。当初は個人墓であったものが、やがて夫婦墓が現われ、さらには明治期に家墓——先祖代々の墓——が登場して、昭和期以降、火葬の浸透とともに本格的に普及してきたとも言われる。このように、墓のあり方は時代とともに大きな変遷を経てきたのであり、また地域によっても多様な形をとってきた。近年取り沙汰されるようになってきた、従来の墓の形にこだわらない自然葬や樹木葬といった新しい葬送のスタイルも、そのような多様性の現われの一つと見ることができよう。

さて、このように多様な墓のあり方のなかでも、土葬に際して石塔を立てる前の埋葬地点に、さまざまな構造物を置く場合がある。これは一般に墓上施設と呼ばれるが、自然石を置いたり割竹を地面に挿しただけの素朴なものから、割竹や籐竹を円錐状に組んだもの、塔婆を柵状に並べて囲うもの、屋形型のものなど、その形態は多岐にわたる。なかでも木製の屋形型のもは、タマヤ、アコヤ、アマヤ、ヒヤ、スヤ、ミドウ、スズメドウ等さまざまな呼称のもと、かつては主に西日本の島嶼部や山間部を中心として広く分布していたが、火葬の普及とともに、現在は減少の一途をたどっている。しかしな



写真1

西ノ島町浦郷

がら隠岐では、木造の小祠(ほこら)状の墓上施設を置く習俗が、火葬移行後も広く維持されてきた。これは島前ではもっぱらスヤと呼ばれ、島後ではスヤともミドウとも称される。

たまたま訪れた島前の墓地で、私が初めてスヤを目にしたのは1998年10月のことだった。石塔が立ち並ぶ墓地しか知らなかった私にとって、スヤが並ぶ墓地の光景(写真1)は大きな驚きであった。「どうしてスヤを立てるのか」という素朴な疑問から出発して、2004年まで、同じくスヤと呼ばれる墓上施設が見られる対馬と壱岐にも足を運んで継続的に調査を行ない、スヤに関する論考をまとめた⁽¹⁾。基本的にはこれによりながら、とくに10年前までの島前のスヤの状況を中心に、概観してみたい。

1 スヤの諸相

周知のように隠岐では、明治初年の激しい廃仏毀釈の結果、すべての寺院が廃寺となり、明治12(1879)年までは寺院がない状態が続いた。そのために神葬祭が盛んに行なわれたこともあって、島前では現在も仏式の葬儀と神葬祭が混在している。一方で、島前を構成する3島の各々では、土葬から火葬への移行過程が異なっている。西ノ島では1980年、中ノ島では1998年——まさに私が調査を開始した年——にそれぞれ火葬場が稼働し、これに対して知夫里島ではまだ火葬場は建設されていなかった。葬儀の宗旨の違いによって、また火葬への移行状況に応じて、スヤの設置にも差異が見られるのではないかと、との予想のもとに私は調査を開始したのであった。けれどもそれらの相違に関わりなく、島前のいたるところでスヤは設けられ続けていた。



写真2 海士町矢原



写真3 西ノ島町浦郷



写真4 西ノ島町浦郷



写真5 海士町菱浦



写真6 海士町福井



写真7 西ノ島町浦郷

スヤは基本的には、高さ1 m弱、縦横約50 cm、切妻・妻入りで開戸をもつ高床式の木製の屋形であり、土葬に際して遺体を埋葬した上に置かれ、石やコンクリート・ブロックで固定される(写真2)。島前の場合ほとくに、ガラス戸を入れたり、階段やひさし(御拝と称する)を付けたり(写真3)、あるいは電灯線を引き込んで電球を灯明代わりに付けたり——西ノ島の浦郷の墓地にのみ見られる——(写真4)等々、さまざまなバリエーションがある。屋形型の墓上施設は島後でも、また岡山県の山間部などでも見られるが、しかし島前のスヤのように独自の進化を遂げたところは他にはないといっている。スヤのなかには野位牌を収め、スヤ花などの飾り物(写真5)、線香用の香炉、灯明などを安置し、さらに故人の生前の好物などを供える。通常、四十九日(神葬祭では五十日)までは、故人の俗名もしくは戒名と命日を記した白い幟——銘旗あるいは野旗と称する——を立てる(写真6)。

ところで島前の墓地をめぐるのは、独特の神仏混淆的な感覚を見て取ることができ



写真8 海士町菱浦



写真9 西ノ島町船越



写真10 西ノ島町船越

る。たとえば、元来は神葬祭の葬具であるはずの銘旗が仏式の葬儀に際しても立てられ、戒名や種字(梵字)、名号などが記される。また盆期間中の墓地にも銘旗が立てられ、遠目にはさながら白旗が林立したように見えるのだが(写真7)、ところによっては、墓のまわりに「南無阿弥陀仏」や「南無遍照金剛」と記された色とりどりの紙片——盆旗あるいは単にハタと称される——を掛けたり、墓やスヤの前に幣を挿したりする(写真8)。しかもそれは、葬儀の仏式ないしは神式の相違に対応するものではない。戒名が記された仏式の墓にも幣が立ち、逆に神式の墓にも盆旗が掛けられるのである。8月16日に流されるシャラ舟でも(写真9)、その装飾に盆旗を用いる一方で、船縁には幣が挿されている(写真10)。あるいは明治初年の神葬祭の導入が、このような神仏混淆的感覚を促すことになったのかもしれない。

2 スヤの略史

調査の際に、「なぜスヤを設けるのか」という率直な質問をすると、それに対して返ってくるのは、「あまりにも当たり前のことなので、スヤを立てる理由など考えもしなかった」という答えだった。スヤの設置はまさに、無意識のうちに受け継がれた伝統的な葬送習俗の中核に位置していた、と考えられる。事実、海士町の一部では、火葬場の開設時に葬儀の簡素化を進める動きがあったのだが、



写真 11

海士町菱浦 (吉川義光氏提供)



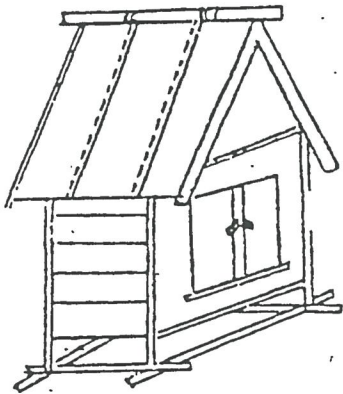
写真 12

海士町菱浦 (吉川義光氏提供)

それでもスヤを設置する習俗が廃れることはなかった。

では、このようなスヤの設置はいつ頃から始まったのだろうか。墓や葬制に関わることの常であるが、はっきりした文献上の初出を確定することは難しい。少なくとも現段階で分かっているのは、明治初年の神葬祭の手引である「隠岐国葬祭式」^⑩の頭註に「素屋ト号スルハ設ルニ及ハス」とあるのが最も古い例である。この文言から判断すると、おそらく幕末の仏式の葬儀においてはスヤを設けることがすでに一般的な慣習になっていたと思われる。逆に言えば、明治初年の神葬祭への移行という新たな動きのなかで、スヤを設置する旧来の風習を廃止しようとしたが、結局のところこの試みは挫折したのであろう。

この後、スヤに言及した文献を見出すには、昭和8(1933)年の『旅と伝説』「誕生と葬礼特輯号」に掲載された水島亮による報告まで待たねばならない。この間、たとえば明治25(1892)年に隠岐を訪れたラフカディオ・ハーンの紀行文にも、盆期間中に銘旗がはためく浦郷の墓地の光景や、神葬祭による子供の葬列についての記述はあるものの、スヤについてはまったく言及がない^⑪。また、昭和6(1931)年には、海士町菱浦の旧家小谷家当主の、黒住教による葬列の写真が二葉残されている(写真11、12)。写真に写るスヤの形状は現在見られるものとほぼ同じであり、少なくともこの時期から受け継がれている形態であることが分かる。ところで、昭和8(1933)年の水島の報告は次のようなものであった。



スヤの図

『旅と伝説』6-7、p.144

「墓は大抵部落の少し高目の南受けに集在して居る此の墓地にある墓石は阿弥陀川石が最も多く、これについて五箇石(本島五箇村産で不質硬度光沢等阿弥陀川石に甚だ類似す)が多い。此は有産階級の墓石で、無産者の墓石は来海石(出雲産)が多い而して此の墓石はたいてい三年か五年長きは十年以上を経過して始めて建立する。それまでは俗称「スヤ」と呼ぶ木製のものを置くこれは神仏いずれも同じだ……」⁽⁴⁾

そこには、現在に至るスヤの基本型を示す模式図も掲載されていた。

水島のこの報告が掲載された『旅と伝説』の特集にも示されるように、この時期、民俗学では墓上施設が調査の対象として取り上げられるようになる。たとえば柳田国男が、全国の葬制・墓制に関わる民俗語彙を収集・整理した『葬送習俗語彙』には、次のような記載が見られる。

「スヤ 対馬の比田勝、壱岐、隠岐等の島々で、墓を蔽ふて置く屋形のこと。隠岐では墓石は大抵三年五年、遅きは十年以後に初めて建立する風であつて、それまでは木造のスヤで覆て置くといふ(葬号)……」⁽⁵⁾

隠岐のスヤについての説明は、先に引いた水島の報告に基づいているが、これが「喪屋・霊屋」の大項目に入れられているところからも分かるように、柳田国男は、屋形型の墓上施設を、古代の喪屋——喪の期間中に親族が籠もる小屋——の残存と位置づけていた。民俗学ではこれが長いあいだ通説となっていたのだが、しかしながらそれはあくまで柳田の推測にすぎず、明確な根拠が示されたわけではない⁽⁶⁾。現在のスヤの規模から考えて、これを人間の籠もる小屋の残存とみなすには相当無理があるようにも思われ、少なくとも現在のスヤの意味を考える際には、ほとんど役に立たない。

3 対馬、壱岐のスヤ

ところで、『葬送習俗語彙』のスヤの説明に見られた、対馬や壱岐の事例は、現在どうなっているのでしょうか。

私は2002年7月に対馬、2003年10月と2004年10月には壱岐を踏査した。対馬では、火葬の普及と本土からの石材業者の進出と



写真 13 対馬与良院内

ともにスヤはほとんど消滅しかけており、古くて意匠もまちまちのものをいくつか目にするだけであった(写真13、14)。

壱岐では、一部の地域でスヤがまだまだ設置され続けている。これには2種類あって、切妻・平入りで引戸をもつ直方体のベニヤ製のタイプ——複数の葬祭業者が扱う——(写真15)と、東部の芦辺町にのみ見られる、切妻・妻入りで格子のガラス戸をもちトタン板で囲った立方体の「位牌箱」——在地の職人組合が製造し、地元の曹洞宗寺院で委託販売される——(写真16)である。形状の違いはあるものの、いずれも火葬への移行後も設置され、なかに野位牌や香炉、故人の好物などを入れる。壱岐では、島前ほど全般的ではないが、スヤの設置は、まだ生きている習俗とみなすことができる。



写真 14 対馬佐須瀬



写真 15 壱岐本村融



写真 16 壱岐瀬戸浦

4 墓上施設の現在

さて、隠岐島前、対馬、壱岐におけるスヤの現状を一瞥してきたが、とくに壱岐と島前では、元来は土葬の際の習俗であったスヤの設置が、火葬への移行後も継続し、独自に展開していることが確認された。その理由は何であろうか。

土葬時代のスヤには、石塔を立てる以前の仮の墓標としての役割と、野位牌や灯明、供物などを収める、一種の祭壇としての役割を指摘することができる。スヤはあくまで一時的な構造物であって、適当な期間で朽ち果ててゆくはずのものであった。ところが近年、スヤを長持ちさせようとする傾向が強まっている。たとえば写真17では、朽ちかけたスヤの屋根だけを葺き替え、ペンキを塗って補強している。

これは特別な例ではなく、古いスヤを修繕したり、シートをかけて保護するケースは後を絶たない。一方島前では、スヤは引退した船大工が製作しているが、作り手の側でも、杉の赤身を用いたり、特注の真鍮の釘を取り寄せて、頑丈なスヤを作ろうとする意識が強くなっている(写真18)。壱岐で「位牌箱」にトタン板



写真 17 知夫村郡

をめぐらすのも、同じ発想に由来するものであろう。

スヤの延命化とも称すべきこのような現象は、もとより直近の故人への哀惜の念の表現であろうが、さらにそれは火葬への移行にともなう家墓の普及に対応するものと見ることもできる。すなわち、各人の個人墓の石塔を立てなくなって、故人を悼むための個別のよりどころが失われ、これに代わるものとして、スヤの「拝みどころ」としての役割が浮上することになったのである。だからこそ、スヤはできるかぎり長く維持されねばならないのだ。「スヤがないと拝むところがない」「スヤがないと淋しい」「お墓とはスヤのことであっ

て、墓石は単なる石塔せきとにすぎない」等々、調査の際にたびたび耳にしたこれらの言葉は、まだ記憶に新しい身近な死者を個別に偲ぶよすがとしてのスヤという感覚を、如実に物語っている。

しかし、人びとのこのような感覚だけで、火葬移行後もスヤが存続しているわけではない。壱岐では、職人組合が製作する「位牌箱」を地元の寺院が委託販売したり、あるいは木工所で製作されるスヤを葬祭業者が販売するというシステムが、敗戦後、徐々に確立されていった。島前でも1997年以降、JAが葬祭業に全面的に参入し、スヤを含む種々の葬具一式を安価に供給するシステムが確立している。従来、伝統的な葬送習俗を担ってきた地縁組織が機能しなくなるなかで、地元の葬祭業の取り組みのなかに位置づけられることが、スヤの存続にとって大



写真 18 海士町菱浦

きな意味をもつことは言うまでもない。対馬の場合は、そのような供給システムがうまく構築されなかったために、スヤは一気に衰退していったのであろう。

もっとも、「スヤなど必要ない」とする若い人びとも確実に増加していて、島前でもスヤの設置が減少傾向にあることは事実である。しかし身近な故人を個別に偲ぶよすがとしてのスヤという感覚がなくならないかぎり、当分のあいだ、スヤは設置されていくだろう。壱岐や島前の事例が示しているのは、土葬から火葬への移行にともなって、スヤが一時的な墓標という従来の性格を失っても、祭壇

としての機能を従来以上に集約することによって存続していくということである。墓上施設の現状は、「伝統は絶えざる変容のうちにこそ成立する」という逆説を端的に表わしていると思えるべきであろう。

当初、石塔のみが立ち並ぶ墓地しか知らなかった私にとって、墓地になぜスヤを設けるのかという素朴な疑問が、そもそもの出発点だった。けれども逆に、当時の私が墓地になぜ石塔を立てるのかと問われたならば、答えに窮したことであろう。石塔を立てる行為もまた、さまざまな変容を経ながら、ある意味では無意識のうちに受け継がれてきた伝統的な習俗とみなすことができるはずである。伝統的な墓制と呼ばれるものを実体視せず、相対化しながら眺めていくことの必要性、それこそがスヤの探求を通じて私が学んだ最大の収穫だったように思う。

おわりに

2014年末、10年ぶりに隠岐を訪れる機会があった。たまたま島後の隠岐島文化会館に招いて頂いて、スヤについて講演したのである。お陰様で講演は盛況だったが、その終了後、出雲大社西郷分院の吉田均氏のご案内で、島後のスヤを見させていただいた。翌日は島前に渡り、駆け足ではあったが西ノ島と中ノ島のいくつかの墓地を回ることができた。

島後のスヤ(ミドウ)は、島前ほど独自の進化を遂げているわけではないが、火葬以後も部分的に存続してきた。その大半は地元の大工によって製作され、現在も数は少ないものの、10年前とほぼ変わらず設置されていた。ただ、古いスヤが多く、なかには20年以上たつものもある。これに対して島前ではスヤは激減し、見る影もなかった。かつてスヤが林立



写真 19 西ノ島町浦郷



写真 20 隠岐の島町西郷



写真 21 隠岐の島町西郷

していた浦郷の墓地でも、古いものが2つあるだけで(写真19)、スヤを設置する習俗自体がすでに過去のものになりつつあるという印象が強い。あるいはスヤの命運もいよいよ尽きかけているのかもしれない。

ただ、鳥後の出雲大社西郷分院では、15年前に共同墓を作り、夫婦の一方が亡くなられた場合、故人のよすがを偲ぶために、一時的に別個に骨壺を埋め、スヤを置くようにしている(写真20、21)。

これはある意味では、スヤの伝統の新たな展開例と見ることも可能であろう。

註

(1)山崎亮「墓上施設の現在——隠岐、対馬、壱岐におけるスヤをめぐる」(島根県古代文化センター『古代文化研究』13、2005年)。

(2)「隠岐国葬祭式」は、平田派の国学者角田忠行が明治初年に刊行した『葬事略記』を本文として、隠岐の事情に合わせて若干の修正を加え、さらに序言と頭註を新たに付して成ったものである。当時は明治政府による神仏分離の結果、全国的に神葬祭が行なわれるようになり、その手引書が多数出回っていたが、『葬事略記』もその一冊であった。

(3)ラフカディオ・ハーン(錢本健二訳)「伯耆から隠岐へ」(平川祐弘編『明治日本の面影』講談社学術文庫、1990年)。

(4)水島亮「隠岐の国」(『旅と伝説』6-7「誕生と葬礼特輯号」1933年、p.144)。

(5)柳田国男編『葬送習俗語彙』(民間伝承の会、1937年：復刻＝国書刊行会、1975年、p.162)。

(6)その後、柳田国男の関心は、祖霊信仰論との関わりで、死穢を浄化させる装置としての両墓制に向けられていくようになり、屋形型の墓上施設についての言及は、まったくと言っていいほど見られなくなる。